

二十七 意識に乗せられて

記憶が正しければ、高等学校を卒業するとき、たしか色紙の寄せ書きに「我思う」と書いた。おくての高校生の理解を超えるこの名高い言葉を、なぜ選んだのかよく分からない。教室で色紙がまわってきて、いつものように機転の利かないまま、苦しまぎれに意識に湧いた語句にしたのだろう。近代哲学の端緒を開いた人は、世界を考察するのに疑いえない出発点は何か徹底的に考えて、考えている自分にたどり着いたのだが、意味深長な箴言でも思ったぼんやり者は、おかげで、いまだにその思考している意識を引きずって、あるいはその意識に乗ったまま、あまり進歩もせず老年にたどり着いた。

こんなことがわたしの意識にのぼったのは、夏目漱石が文学を論じるのに意識の動きに注目したことを知ったからである。漱石は、文学的内容の形式が「焦点的印象または観念」＋「これに付着する情緒」だと定式化して、文学に接して読者がつきつきに受けとる焦点的印象または観念が、心理的な「意識の波」として交代していくことを説いた。ところで漱石は、「吾人が文学に待つ要素は理性にあらざして感情にあり」とし、また「情緒は文

学の試金石にして、始にして終なり」としたから、意識の波にともなう情緒にこそ文学の価値を認めたのである。

その『文学論』を、「観念＋情緒」という命題と心理学上の意識の概念によって説き始めたやり方には、英文学科の学生への講義をとても身構えて始めたことが表われている。それが必然のなりゆきだったことは、岩波文庫版を編集・注解した亀井俊介という人の解説から分かる。その解説はわたしの漱石観を新たにした。一九〇〇年英国に留学した人は、英語ではなく英文学を研鑽する道を選ぶと、対象とした文学を通して関心をその外延へと広げる。するとそこには、一九世紀末までに大いに進展した西洋の人文科学があった。漱石はまじめな人だったに違いない。心理学や社会学まで勉強し、積み上がるほどのノートをつくったという。母校に教授として迎えられると、そのノートを基に「文学論」の講義を組み立てた。勢いそれは、西洋の学問的な装いを帯びる。ただし、「文学とは何か」という問への追求は、後世の西洋の優れた論者ほど深くないように思う。だが、文学によって誘動される意識つまり情緒をめぐっては、じつに存分に論じている。引用されるおびただしい例文が、文学的教養の広さを教える。『文学論』での考察と整理が漱石自身の創作へ実り豊かな準備になったのだ、と亀井俊介は言う。

漱石については、その神経衰弱とくにロンドンでのそれをしばしば耳にする。自分でも、

ロンドンでの二年は最も不愉快だった、また帰国後の三年余りも不愉快だった、と語っている。意識という言葉につられて、若い文学者の意識になが起きていたのか興味が湧く。夏目金之助は大学で西洋の教養を積んだけれども、英国に行くまで必ずしも学究の生活をしてきたわけではない。秀でた漢学の素養が比較に役立ったとしても、日本の文化と異質な西洋文学の研究は楽しみだけではなかっただろう。異国に住んで初めての本格的な人文学の勉強は、日本で人格を形成してすでに三十歳を過ぎた人にとって格闘であり、生来の傾向に厳しく作用したのだと想像される。『文学論』には「無意識」・「意識下」という言葉まで出るが、心理学のテキストを読めば、考察は自身の意識にまで及んだとも考えられる。周囲のことを顧みないほど没頭していたせいも、他人が夏目のことを心配したが、事実、意識のなかでストレスは強かったに違いない。それは尾を引いて、帰国後の文学論講義の組み立てもやはりストレスだったのだ。小説を書くことに専念するようになってからも、ヨーロッパ文明あるいは近代との格闘は、神経に負担をもたらしただろう。この国の後代の人間であるわたしは、漱石先生の胃痛のおかげをずいぶん受けている、と言うことができるだろう。それでもわれわれは、今なおアメリカとヨーロッパの真似をしがちで、不愉快を少しも感じないとしたらのんきすぎるという状態にある。

十九世紀、自然科学の急速な展開に刺激されて、人間の学はさまざまな道を探求して進み、そのなかで、心理学も科学的な方法を取り入れていった。漱石の、波動的に変化していく意識によって文学を理解する議論は、そういう心理学の成果を用いたものだ。しかし今日から見ると、心理学はまだ初期の段階にあった。「無意識」をはっきりと人々の意識にのぼらせたS・フロイトの精神分析は重大な画期をもたらしたが、わたしは、二十世紀になってからそれを批判したJ・デューイの心理学の方が優れていると思う。フロイトは自分の精神分析を科学的だと考えたけれども、実験的・臨床的な手法として不十分だった。夢判断を実証的な議論とするのは無理だ。

他人の意識は、内部に分け入って観測することができないから、態度から推定するしかない。だが、考えてみれば不思議なことに、意識は自分自身を意識できる。だから、自分の意識の動きを観察することによって、意識について研究することができる。心理学が発展するまでは、そういうやり方で、人間一般や対象とする特定の人間の心理が考察された。そこへ科学的な方法を取り入れることによって、西洋の心理学は発展したのである。耳学問によると、インドでは、仏教哲学で「唯識」の理論が発展し、知覚や認識まで含む広い意味で意識作用の形式が精密に考察されたようだ。唯識理論は、無意識を二層に分節して表層の意識に追加し、「識」を三層構造で捉えた。西洋でフロイトが無意識を「発見」す

る以前に、意識の形式論はできていたのである。

意識の思弁的な考察は果てしがない。ある場合には人間の意識は神秘的な状態にまで至り、西洋でも東洋でも、宗教的な神秘体験を語った人々がいた。二十世紀後半、独創的な哲学者井筒俊彦は、「唯識」のいう無意識の最下層「アラヤシキ」を参照して、『意識と本質』で意識の形而上学を展開した。しかし、この人は事物の物的な側面を消す神秘主義にまで至っていて、わたしはそこまで付いて行くことができない。

二十世紀の初期、デューイの社会心理学はいかにも台頭してきたアメリカにふさわしい。そこではヨーロッパの古い体質が希薄で、社会のあり方や人の考え方が実際のだったから、哲学は、ヨーロッパの伝統をひき継ぎながら形而上学から抜け出ていた。デューイは、心理学的な問題を『学校と社会』など実践的な課題のなかで考え、意識がその一部である人間性を行為と結びつけて考察した。意識を単に意識としてだけでなく、習慣などに現実化される対象として捉え、人間を考察している。そのプラグマティズムは、時代のせいもあってみずみずしく、現実の社会問題に対しても積極的見解にあふれている。爛熟しすぎた現代アメリカの超功利主義的な思潮と異なることに驚かされる。

科学と技術の発展した二十世紀の後半から、心理学は人間の身心の実証的な研究をとり

入れて発展してきた。ある意識の活動が、脳と神経回路の物理現象の計測によって調べられるようになった。それでもまだまだ、人間の意識の現象を自然科学的に説明するには道半ばである。J・ハーバーマスが行き過ぎた科学主義を批判するのは妥当だと思う。ところで、カントを継承するハーバーマスの人間理解に、デューイのプラグマティズムが流れこんでいるとするのは、浅はかな理解だろうか。ともあれ、意識のことをさらに深く考えるほど現代の心理学や神経科学の知識はないから、この辺で終わるとしよう。

それにしても、「意識とは何か」という問にまったく触れないわけにもいくまい、門外漢も自分なりの意識をもっているのだから。デカルトは脳に意識を担う部位があると考えたらしいが、現代科学はそういうことを言っていないので、身体のなかで意識は広がりのある存在の仕方をしていることになる。実際、意識は自分の手足の先まで意識している。神経回路は末梢神経にまで広がったネットワークを構成しているのだ。ところで以前に、ロンドンのタクシー運転手の海馬が大きいという記事を見たことがある。おとなの脳細胞は増殖しないと考えられていたが、必ずしもそうではないようだ。ニューロンがその触手を伸ばしほかの脳細胞との連絡をつけていく活動は、生きているあいだ続いていると考えべきだろう。そう考えれば、哲学者達たとえばデューイやハーバーマスが考えたように、

人間の精神のあり方が意志による行為と相関をもつことが理解しやすい。人が何かのうちこめば、そこで働く神経回路のニューロンは触手をいつそう太く伸ばし連絡を密にするのだろう。わたしは心身と書くよりも心と書くことを好むが、今は、神経回路という「身」の方に注目しているように見えて、精神活動つまり「心」を考えているのである。「身」は、精神活動が行動となつて現われる場にはつきりと登場する。すなわち、神経回路を通じて指令が筋肉に伝わつて行為が起きるとき、人間が姿をあらわにする。『莊子』のような中国の書物には、料理や弓の達人の信じられないほどの奇跡が語られる。それは、人が何かをするのは、「身」と「心」が一体となった活動だということを説いているのである。すなわち、人は神経回路の張り巡らされた身体全体であり、生きている人間のなかで意識は、座禅にうちこんでいる道元や牛を解体している包丁(人名)のように、アイドリングしあるいは行動しながら働いているのだ。

若気の至りで書き残した言葉は、わたしの意識の奥底に居場所を得たのだろう、このように手に余る問題をあれこれ考えることがある。こうして老年の今も、「思っているわたし」は「存在している」。

さて、神経回路の張り巡らされた全身であるわたしは自分の意識を意識しているのだが、科学・

技術の進歩した現代、昔なら考えられなかったような体験をしている。九年前、意識を中心的に担う脳に腫瘍が発見され、毎年、核磁気共鳴画像法(MRI)で大きくなっていないか検査を受ける。原子核の研究に従事したことのある人間としては、自分の脳の組織の原子核を磁気で共鳴させることに、特別の感じを抱いている。そして今年、陽電子放射断層撮影(PET)で癌がないか全身の検査を受けた。陽電子を放出して崩壊する軽い原子核を組みこんだブドウ糖を体内に送れば、ブドウ糖を取りこんだ細胞で放出された陽電子がエネルギーの高い光(γ線)を対発生させるので、その光を検出しコンピュータ処理すれば、多くのブドウ糖を取りこんだ部位が三次元画像として表現される。ところで癌細胞は最もブドウ糖を消費するので、もしあればそこが特定できるのである。わたしは、自分の体の中に少量の放射性物質を入れて、原子核反応を体験したのである。これもわたしに特別の意識を抱かせる。あおむけに横たわって受ける検査のあいだ、意識はとりとめのないことを意識していたが、身心が原子核の現象を知覚することはない。つけ足せば、脳もブドウ糖をよく消費する部位だから、その画像は意識が活動中であることを証言していた。つまり、わたしは「考えて、存在している」。だが、脳内での原子核の出来事は意識のあずかり知らぬところで起きたのである。もちろん、わたしの意識は自分の活動がいつまで続くか知る由もない。